
DarkerThanBlack-暁の鼓動-

大月聖哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Darkert HanBlack - 暁の鼓動 -

【Nコード】

N9357W

【作者名】

大月聖哉

【あらすじ】

東京エクスプローションから僅かに経った日。

未だ東京に動乱が続き続け、契約者絡みの事件は絶えない。

組織と呼ばれる謎の集団が追い続ける契約者、メシエコード【BK

201】黒の死神。

それと同じくして組織に追われる1人の契約者がいた。

逃亡（前書き）

任務：東京エクスプロージョン現場偵察

優先事項：現場周辺データ確保を最優先

サポート：なし

なお、緊急事態時には殺害を許可する

逃亡

この世の空は偽りの星空に変わってしまった。

地獄門。^{ヘルズゲート}東京に11年前、突如として表れた異常な領域で、直径1

0kmと高さ500mの壁が日常空間と隔てて今も存在している。

物理法則が歪み、異質な植物が見つかるなどの異常現象が起きる地獄門が出現してからは、空は偽りの星へと変わり、本物の星を見上げることはできなくなった。代わりに表れる星の一つ一つは、契約者と呼ばれる特殊能力を有する人間の命の表れとなり、彼らの命が費えた時に星も落ちる。

契約者は、地獄門が出現してから現れ始めた新人類で、いわゆる「瞬間移動」や「重力操作」など通常ではあり得ないとされる異質的能力を有している。だが、その能力を使うにあたってはそれ相応の対価が必要となっている。「頭に耳をつける」などの前払い型、「ゆで卵を食べる」「煙草を吸う」などの後払い型、「老化」「若返り」「車椅子での生活」などの自動支払い型、これは稀にだが支払い対価が消失するケースも見られた。

これらの対価を払わぬ限りは自由に能力を扱うことはできない上、対価自体が契約者にとって望んでいるものではないことがあるので苦痛な場合もある。また、彼らは感情が希薄化してしまう上に合理的かつ冷靜的な判断しか下せなくなる。つまりは、自分自身を優先的にし、仲間を省みないようになってしまふということである。またそのことや殺人などの犯罪行為に対する呵責が一切無くなり、例え肉親や恋人を手にかけることになっても躊躇いはない。

契約を発動する時には、瞳孔が赤く光り、また「ランセルノプト放射光」という青白い光を体から発するため発動したかの有無が分かりやすい。故に発動時にそれを見つけることで対策が取れることができ、契約者側にとっては不利なケースもあり得る。

これらのことを熟知している“普通の人間”ならば、契約者を相手

にしても負ける確率はそう高くない。

偽りの星によつて空に輝く契約者の星を認識するために付けられた番号「メシエコード」。そのうちの一つ、【AS093】の星が輝いていた。

警視庁外事四課所属の、堅いの良い体格に無骨そうな顔つきをした警部、斎藤雄介は持ち前のスーツを着こんで走っていた。深夜のネオンが輝くビル街の中、防弾チョッキをスーツの上から着て、さらに日本の警察官が基本的に携帯することのないサブマシンガンを肩からぶら下げて持つ彼は1人の男を追っていた。

胸ポケットにしまい、イヤホンを左耳につけておいた無線機からは逐一追跡中の男の情報が耳に届く。だがその情報を聞く度に、彼は走る方向を切り替えては現在位置を確認しつつまた情報を耳にして行動するといったパターンを繰り返していた。

おかげで同行している3名ほどの部下も右往左往としている上、危険区域に指定されていない場所に向かうと民間人から奇異な視線を向けられる。さすがは首都といったところで、繁華街では人口密度は非常に高く見渡す限り人のいない場所が見当たらないほどだった。「くそっ…どこにいやがる！」

走り続けて数十分。体力には自信がある斎藤だったが、さすがに疲労が蓄積してきた。

滲み出る汗が肌着を湿らせ、頬や額を伝う玉のような汗はポタポタと地面に滴る。後ろを見れば、機動隊の服を着た部下は自分より疲労が溜まっているように思えた。

『こちら第二班。B地区に目標が移動。付近の部隊は急ぎ現地へ急げ』

急に入ってきた情報に、斎藤は僥倖だと思えた。

B地区は現在斎藤のいる場所から程遠くなく、走れば数分で着く距離だった。

これまでずっと踊らされ続けていた彼は、もうケリをつけたい一心

でいる。ここらで年貢の納め時だ…と不敵な笑みを浮かべた斎藤は、振り向いて部下に激励の言葉を伝えた。

「おい、B地区に目標が向かっている。急いで行くぞ！」

しかし、思ったよりかは反応が薄い。それどころか何か不味そうな顔をしている者もいる。

「何をぐったりしてる！あと少しだから気合い入れてけ！」

「あの…斎藤さん…、周りの人に聞こえてますよ？」

「…え」

斎藤は我に返ったかのように周りを見渡す。

すると部下の言った通り、周りの一般人が不思議そうにこちらを見ている。しかも写真を撮る人間までいる始末。陰に隠れて笑っていたりとそのリアクションは様々だったが、斎藤は茫然としつつも自らの失態を後から気付いていた。

闇夜に紛れ込むことは、今の東京では不可能に近い。陰に隠れてみても上を見れば、電線を伝って観測霊がこちらを見ている。観測霊が来れない場所へ行くと行き止まりや警察のいる方向へと導かれる。サングラスをかけた青年は、忌々しそうに観測霊を見上げながらどこへ向かうかを考えていた。警察のパトカーのサイレンは高く鳴り響き、自分を捕まえんと追いかけてくる。また、どこかの組織が手回しにでもしてきたのだらう契約者が、警察と手を組んで攻撃してくる。

繁華街からは程遠く、住宅街からも離れた。今は薄汚れたビルの間を這い、港へ向かっている。ここまで来るのに契約者を2人相手にし、撃退はした。だが相手にするたびに自分の位置を知られてしまい、警察の網がじよじよに締まってきている。

手持ちの拳銃は弾薬が心持たなくなり、握っている手も汗ばんでいる。着ているロングコートも警察からの発砲でちらほらと千切れかけ、頬や腕のかすり傷を気に止めるとじわじわと痛みが広がる。体に広がる疲労も蓄積され、少しばかりの休憩を欲してさえいる。

だが、彼は休むことはできなかった。振り向けばパトカーのランプが赤く光り、ほんの僅かながら警官の声も聞こえる。ここで休めば、1分もしないうちに見つかるだろう。

「おい、そのー！」

不意に横から怒号が飛んでくる。見なくても分かる、警察がこちらに気付いたのだ。

壁に寄りかかりつつも歩き続けていた彼は、その言葉を皮切りに走りだした。後ろから発砲音がする。パトカーのサイレンが先ほどよりも大きく鳴り響く。

ビルの隙間を抜け、倉庫街へ飛び出る。そこにも待機していた警官が4人ほど、防弾チョッキを着てマシンガンを持っている。突破しようにも正面からでは難しすぎる。

そう判断した彼は、覚悟を決めて青白い光を体から放出した。能力の発動である。

4人いた警官は、彼が目の前で手を翳し、その手が握られた瞬間、急に苦しみだした。

「能力を発動すれば、貴方の位置は丸裸…それを覚悟の上でやってるんですか？」

「…Y M 0 0 9 か」

倉庫街の陰から出てきたTシャツを着る男は、ガムを噛みながらそうつぶやいた。

「A S 0 9 3 …ここで終わらせましょう」

【Y M 0 0 9】の体が青白く光る。ランセルノプト放射光だ。

【A S 0 9 3】は能力を知っていた。【Y M 0 0 9】の能力は、物質の溶解。そして対価がガムを噛むこと。物質の溶解は手に触れたものを任意に溶けさせることができ、相手を沈めさせ窒息死させることが戦法だった。

【Y M 0 0 9】の手が地面と接する。途端に足元のバランスが崩れ、保とうとして無意識に出した手もずぶずぶと地面の中へ消えていく。周りに倒れていた警官達も抵抗なく地面の中へと消えていき、その

姿を暗ました。

「…くっ！」

このままやらねばなしというわけにもいかない。【AS093】の体がまた光り、赤く光った眼が目の前の敵を見据える。だがその敵は、おじけるわけでもなく平然と立っている。

整然としている【YM009】には、【AS093】の能力を把握しきっていた。【AS093】の能力は、空間を越えた物質掌握。対価はサングラスをかけることで、能力を発動するに至っての行動は、相手を見ることが対象に対して行う動作をすること。警官達に対して手を握ったのは、心臓を手で握り動作不良に追い込む行為を行ったためである。

【AS093】の手口は決まってそのパターンだった。証拠が一番残りにくく、かつ接近せずに行えるこの合理的な殺し方は暗殺に向いている。嫉妬という感情は契約者は持ち合わせてはいないが、それでもそれに似た何か【YM009】の中にこみ上がっていた。だが、その合理的な行為しか行えないと契約者は分かり切っているのに、何故この目の前にいる契約者は能力を使うのだ？

その疑問に至るまでの数秒で、彼は自分の身を持つてしてその意味を知った。

「が…！？」

突如襲う激痛。それも心臓に。

握られたわけじゃない。彼の…【AS093】の両腕は地面の中に埋まり、握ることは不可能なはず。なら他に何が…！？

心臓に手を置きもがき苦しむ【YM009】の視界に、あるものが映った。

□！？

【AS093】の口が不自然に開いたり閉じたりしていたのだ。それも、何か食べていたかのように、今も何か嚙んでいるかのように。

あいつ…まさか！

心臓を嚙んだ！？

「あ…あり得ない…！」

「……………生肉は嫌いだ、柔らかいから」

ぼそつと呟いたつもりの【AS093】の声は、はっきりと耳に届いていた。

おそらくは内出血を起こしているだろう。それも多量の血を流すほど…。

もう助からない。彼の合理的な判断は、既に【AS093】を倒すことなど微塵も考えてはいなかった。膝を付き、口から情けなく涎を垂らし、目は今にも飛び出ようとしている。呼吸はするたびに心臓が痛み、肺に十分に酸素が行き渡らない。

握る手はコンクリートの地面を擦り、手汗が彼の手形を作る。

「……………ふ、ふっ…しかし貴方に逃げることはできない…！その“沼”からは…脱出できやしない」

悪あがきだった。しかし事実であり、彼の残した最後の名誉の証である。

パトカーのサイレンの音が近い。元々そんなに遠くない場所だったのだから、ここに辿り着くのも時間の問題…。

「……………だが…私も…帰る場所なんて……………」
視界が霞む。

彼【YM009】は最後の力を振り絞るようにして自分の体から青白い光を発させた。

もう合理的な判断はできていない。錯乱状態に近い。

両手をしっかりと地面につけると、自分の周りの地面を軟化させていく。【AS093】の驚く顔が、サングラス越しからも伝わる。

「組織…にも、警察…にも……………私の死体を…好きにさせるものか…」

【AS093】の“沼”は、軟化こそしているがあくまで鹵獲させるために浅く作った。だが自分の“沼”はそんな生半可なものではない。10秒もしたころには下半身が完全に埋まり、残る上半身も間もなく消える。

「お前…！？」

「組織も…警察も…君を欲している……嫉妬しちゃうな……」

顔だけが残った時に言った言葉は、彼の執念の表しのように思える。最後に見えたのはパトカーのランプが激しく光り、数人の警官が【AS093】を囲もうとこちらへ駆け寄ってくる姿と、それに気付いてか気付いていないのか、どちらにしても目の前の敵の死に際を見つめる光景だった。

さよならだ、ケイティ

感情が希薄になりながらも愛した人の名前を浮かばせ、【YMOO 9】の星が空から落ちていった。

逃亡（後書き）

2時間後 警察庁

契約者専用留置所内取り調べ室

容疑者：【AS093】

担当：霧原未咲、斎藤雄介、河野豊、大塚真由

容疑：殺人

動機：不明

考察：10年前より存在した契約者。余罪があると推定。

相対利用（前書き）

空間を越えた物質掌握

離れた所にあるものを、したい動作をすれば実際には触れていなくても物質には触れているようになるという能力。

例えば、離れた所にあるコップを取ろうと能力を使えば、その場でコップを掴む動作をすれば離れた場所にあるコップを掴んだり破壊したりできる。

引き寄せることや逆に接近することも可能。また触れることのできるのは視界の範囲内のものだけであり、視界の範囲内のものであれば心臓などのある程度不可視なものも掴める。

相対利用

警視庁の契約者専用収容所取調室。4方を柔らかいマットで囲い、比較的明るい照明がついている。従来の薄暗く気味悪い雰囲気を取調室との違いは一目瞭然だ。部屋の前には重装備の警官が2人待機し、さらに長く続く廊下と多数の監視カメラ、複数の自動作動式鉄格子と防弾断熱扉、極めつけに地下にあり一切の人が入れるほどの排気口がない。あらゆる能力者対策に設置されたこの場所は非常に優秀で、【AS093】を連れてくるまでに収容している21人の能力者は一度も脱獄した試しがない。

マットで囲まれたこの取調室を見て、【AS093】はまず、自殺防止のためかと察した。もし取調中に暴れてしまい、頭を打ちつける等自傷をして万が一というケースが起きた場合に備えているのだろう。

【YMO09】との戦いからすぐに、警官隊に囲まれた。そしてあの軟化した地面から救われたものの、すぐに手錠をつけられた上にサングラスは没収。現場責任者と思われる厳しい顔をした女性と体育会系のような顔つきをしている男に両脇を固められ警察庁まで連行されたのだ。

正直、逃げることは不可能ではなかった。だがそれで手錠を外せることはできないし、何せ逃げ出した所で落ち着く場がない。皮肉なことだが、誰にも追われることなく安全にいられる場所として警察に連行されるのを選んだのは、合理的な判断といえるのだろうか。

「……………」
ヘルズゲート
「地獄門の警備員を殺害したのはお前だな？」

一つの机を挟んで立つ男は、警察庁に連行されるときに両脇に立った内の1人の体育会系だ。その後ろには、記録を取る役目を任されたのか、ワインレッドのコートを着た若い男が不安そうにちらちらと見てくる。

「……………」
この国には黙秘権という便利な権利がある。不利であろうとも有利であろうとも、言いたくないことは黙ってやり過ごすことのできる被疑者への権限だ。

もちろんこの警官は、それを逆手にとつて全て質問を黙認するものと見做すだろう。だがそれもまた僥倖。どの道この件は表沙汰にできないこと。それに契約者が犯罪者となれば法廷に出すことすら億劫に感じるだろう。

だが

「証拠は拳がつてるんだぞ！映像にもしつかりお前の顔が記録されているんだ！」

嘘だな。【AS093】は声に出さずともそれを理解した。

事前にチェックした限りでは、ヘルズゲート地獄門の周囲に監視カメラはあつても、殺害現場にはそれがないことは確認できている。それに目撃者がいたとしても、それを見逃すほど甘くない。やや自信過剰だが、契約者の質から考えれば自分だつて容赦なくやるだろうと推測できている。

「…そりゃ気持ちも分かるさ。お前も契約者だ。存在を消されるのは嫌だろう…。だがな、罪を犯すのはどういう理由があつても駄目なことなんだ」

気持ちなど微塵にも分かつていないくせによく言う、と心中で苦笑した。苦笑といつても、それはあくまで表現的な問題で、こんな感じだろうと思つた程度だが。

パイプ椅子に座る尻が痛く感じる。後ろで組んだ手にかかる手錠がどうにも気にかかり、引つ張ったりするがどうにもならない。

「な、正直に言ってくれ。俺らも何か手伝えることがあればやるからさ…。ほら腹減つたる？かつ丼、食うか？」

さつきからこの男、言っていることが支離滅裂だ。

急に無い証拠を叩きつけたかと思えば、声のトーンを落として同情を始める。かと思えば社会の厳しさを説き、親身に接し始める。警

察としてみれば下手くそな手順だろう。

目の前に置かれたかつ丼を目にしても、大した食欲は湧かない。湧いたところで言うことなど1つもない。それどころか、自分が食べたそうにジツと見つめている。

「……………」

「…な、何か言ってくれよ」

こちらが少し睨みをきかせただけで、何か罰が悪そうに視線を逸らす。

この男のシナリオ通りにいけば、ここで俺は何か話す予定なのだろう。だが話すことは毛頭無いし、ここで話さないことは分かり切ってるだろう。

時間の無駄か暇つぶしか…と思い天井に顔を向けた瞬間、一つしかない扉が開き、キリッとした目をしたスリムな体型の女性が入ってきた。男はその顔を見てすぐにしっかりとした姿勢になり、敬礼をして向き直る。ワインレッドのコートの男も同様で、おそらくはこの一番身分の高い人間なのだろうと思わせる。

「斎藤、代われ。お前ではこの男は無理だ」

「はっ…いえ、しかし課長の手を煩わせることは」

「お前の様子を見ていたが、あれはなんだ…！？ドラマの見過ぎじゃないのか？」

自分よりも一回りも大きな男に、齒に衣着せぬ言い方で責めるその様は女傑を連想させた。

斎藤、と呼ばれた男は課長に責められた末、他の場所で待機しているとかわれてすぐごと取調室から消えていった。代わりに中に入ったその課長は、立ったままこちらを見ている。眼鏡の向こうに見える眼は、契約者に対する恐れは一切感じない。

「…座るわね」

「……………」

別に言われなくても良かったことだが、それを言うってから課長は目の前の席に座った。

「……………」

沈黙が続く。時間を忘れさせるのと同時に、思考が鈍る。

目の前の課長はこちらと時計を交互に見つつ、何かを待っているように見える。

「……………」

「…………… 貴方は」

5分ほど経っただろうか。急に課長は話し始めた。

それに少しばかり反応が遅れて目の前に視線を向ける。相変わらずキリツとした顔つきの女性が眼を逸らさずに見つめてきていた。

「何故、あの場所にいたの？」

「……………」

ヘルズゲート地獄門にいた理由。そんなものは単純明快だった。

答える必要が感じられなかったが、なんとなく遊び心で答えることにした。

「…………… 興味があつたからだ」

「興味？」

課長が深く追求してくる。その時突き出してきた顔と同時に胸ポケットを見たのだが、どうやら警視らしい。女性で若々しい年齢で警視とは中々のエリートであり、キャリアであることを示していた。

「1年前のあの場所で起きた事件：あの時に起きた変化を見ておきたかった」

「変化……………」

彼女はおそらく、契約者らしくない非合理的な考えに啞然としていだろう。無論これは嘘なのだが、あながちそうでもない。ささやかながらにそのことについて興味を持っていたのは間違いなし、任務を受けたのはそのことを知ることができるのでないかという合理的判断から基づいている。

「だが見てきた時に見つかってしまって、銃を構えられた途端について…能力を……………」

「……………」
これも嘘だ。見つかったのはデータ採取の帰りに予期せぬ遭遇に会ってしまい騒動に発展し、発砲されたのも静止を振り切ったからだ。それに能力はいつでも使える。モラトリアムとは違う。

「…貴方は組織って知ってる？」

「…組織？なんという？」

「分からないわ。ではE P Rは？」
イブニング・プリムローズ

「…ツキミソウのことですね。しかしなんのことか……」
イブニング・プリムローズ
組織というのは名称不明の組織のことだろう。E P Rは東京エクスプローションを引き起こすきっかけになった組織のことだ。そのリーダーの名前はフェブラリー。アンバーと呼ぶ人間もいるらしいが、こっちの方がしっくりくる。

「…本当に知らないのね？」

「…はい、そのツキミソウと組織については、特に何も」
ここまできたら成り行きに任せるほかない。遊びが過ぎたといえれば反省するしかない。

女性警視は何か考えているようで、口元を手で抑えつつそれに顔をもたれさせていた。

その間、この先のことを考えていた。任務に失敗したとはいえ、まだ手を切られることはない。とはいえ、このまま済むわけもないだろう。何か手柄を立てない限りは復帰も難しい。

「…もし、貴方がこのまま殺人罪で起訴されれば、ここに来る途中で見た者と同じ末路を辿るわ」

「……………」
囚人は皆、やつれていた。その感想しか思いつかない。

「だが我々に協力するというのなら、酌量措置をとってもいい」

「え、ええ！？課長それって」

「河野、少し黙っている。それから今から言うことはそれに書かなくていい」

反対する部下を抑えて話し続ける。

少しばかり頭を上げ、警視の眼を見る。その眼は確かにしっかりとしていた。さつきと何も変わらない、キャリアウーマンとして出来上がった目つきだ。

「我々も契約者の手を借りたいと思った時はある。事件解決の手助けをしてほしいんだ」

「……………」

手助け、か。

少し迷いが生じた。万が一ここで拒否すれば、それはいつ出れるか分からない収監施設でぼんやりと過ごす日々が続くだろう。組織からも名前を消され、居場所を失う。

だが拒否しなかった場合はどうだろう。上手くいけば警察内部の情報が入る上、組織にとって不利になることは先回りして伝えることもできる。密偵のような役割を、果たしたことがないとは言えないので自信はある。

ほぼ答えは決まっていた。だが、答えを出す前に1つだけ組織にも警察にも利益をもたらすことが思いついた。

「…【BK201】」

「…え？」

「…もし私がそちらへ手助けするようであれば、【BK201】の情報を手に入れたい」

東京エクスプロージョンの主犯と目される契約者、【BK201】。通称、黒の死神。知らぬ契約者は一般人しかいないとさえ言われるその契約者は、かつて組織に所属していたが今はその組織を離反し追われる身となっている。

「…李君を？」

「…何か？」

「え…あ、いや、なんでもない。約束しよう、情報を提供すると」
内心で満足していた。これで組織にも面目は立つし、警察側に協力する理由もできた。後は尻尾を振る振りをして協力すればいい。

「…分かりました。ではこちらにも約束しましょう。貴方がたの事件

解決を手助けすると」

「本当ですね？」

「…契約者は、嘘をつかない」

契約者は嘘をつく。その言葉を腹に隠した【AS093】は、手錠を外されサングラスを返還されると希薄化した感情の中で無理やり笑みを作り、今の自分の思いを体現した。

相対利用（後書き）

物質の溶解（人工物）

手で触れたものを任意に溶かすことができる能力。手で触れている場所からではなく、手で触れているものどこからでも溶かすことが可能。

また溶かす範囲は自由で、浅くしたり深くすることもできる。

人工物の範囲は、加工や融合されているものに限る。

共同歩調（前書き）

【A S 0 9 3】

目的：警察内部に入り込むことで行動や目的を知り、組織への貢献へと繋げる。また、契約者のスカウトや暗殺も行う。【B K 2 0 1】
の殺害を最終目標とする。

霧原美咲

目的：契約者を利用した事件の早期解決。

共同歩調

警視庁内部にいくつかある職員用休憩所。大きく開けた窓と4つの席と1つのテーブルが4セット、観葉植物と自販機もある。部屋の隅には小さなTVもあり、一般的な休憩所そのものだった。他の社員が憩いの場として扱えるように拵えたのだが、今は1人だけしか使用していない。

【AS093】はその後、交換条件を互いに提示した上で協力することを決め、霧原率いる第四課の1人として参戦することになった。現状では正式な警察官としての枠組みではなく、あくまで探偵などの外部支援としての関係ということになっている。

霧原自身、何故彼を信用して利用したのかが分からなくなっていた。殺人を犯した犯罪者を信じるなど、警察にはあつてはならないことだ。

しかし、契約者を利用して契約者を捕まえろ、という上層部からの指示とあつては多少の無理があつてもその通りに動かざるを得なくなる。あれほど契約者を嫌っていた者達が、敢えて契約者の力を利用して事件解決へ向かわせる。その思想は良きにしろ悪しきにしろ、契約者に心おきなく能力を發揮してもらう絶好のチャンスのようなものだ。

【AS093】の能力は霧原自身良く把握できている。それが事件解決に利用できる能力かどうかは分からないが、どの道このまま彼を逮捕することを良く思っていない人物がいるのだろう。

それが組織の人間でないことを祈るが…。
「課長、こんなところにいたのですか」

斎藤、と声を出そうとしたが、その後ろにいる【AS093】の姿を見てその言葉を飲んだ。

今の彼は手に手錠をかけており、さらに行動時には最低1人の警官が見張りとしてつくことになっている。外出時には2人以上つくか、

それとも発信機をつけるかの2択になっている。

「なんだ、お前も休憩か？」

「いえ、こいつが喉が渴いたというもんですから……」

ちらつと視線を【AS093】へ向ける。相変わらずの感情のこもっていない眼でこちらを見返してきたが、眼が合ったと分かった途端に自動販売機へ視線を移して商品を吟味していた。

「契約者だって生き物、腹は減るし眠たい時もある」

「……それくらい分かっている」

「それに金だつてほしい」

少し判断に遅れてから斎藤が慌てて財布を取り出す。顔は渋々とした感じだったが、霧原に目を向けて何かを感じとったのか、中から硬貨をいくつか取りだして渡す。

120円。それだけを手渡した斎藤は、催促のために差し出した掌に乗せ、【AS093】が缶コーヒーを買うのを見続ける。契約者で、今は拘束されて何もできないことは知っていても、何か超人的な能力を突然使ってきてきそいで怖い。今もスーツのジャケット下に隠してある拳銃に、いつでも手が触れられるように動作を頭の中で反芻している。

そんな不安など全く考えていない【AS093】は、温かいコーヒーに口をつけて黒い液体を味わった。その顔は、美味いとも苦いとも思えない。契約者の感情の薄さからは、あまりその真意は分からなく、今も何を思っているのかは予想もつかない。

「……………そっいや、俺の寝床はどうするんだ？」

「その点は心配ない。こちらで用意させてもらった」

警察で、近くのホテルを一室借りてある。そこに【AS093】を寝泊まりさせ、いつでも呼び出せるようにしておく。さらには周りの部屋、というより一階を全て貸し切っており、万が一別の宿泊者が泊まって危機に会うような目にも合わないように配慮してある。

これらの経費を出すのには少々苦勞したが、それに似合う契約者の実用性があれば損にはならないはずだ。

「そうかい…じゃあ今日はもう寝られるのか？」

「残念だが、これから仕事だ」

「それは契約者を必要とするのか？」

黙って頷く霧原に、別段文句も皮肉も言わなかった。

隣りにいた斎藤は微妙な顔をしてはいた。彼は契約者を信頼はしていない皆の中でも、ダントツで信頼はしていなかった。銃を手にかげようとしている彼の心境は、いずれ【AS093】を射殺する日が来るのではないかという、敵意に満ちた感情に満ちていた。

【AS093】と出会う数日前。東京都23区のオンボロアパートの一室で、殺人事件が起きていた。被害者は50歳男性、職業は中学校教諭。死因は内臓破裂と多量出血。事件現場にはおびただしい量の血痕と、壁に寄りかかって痛みを苦しみながら息絶えた男性の死体があった。猟奇殺人ならばそれで片はつくが、調査をしたところ契約者の犯行ではないのかという見方が強くなった。

物質の膨張。【PM177】の能力で、彼の星が輝いたのは犯行時間とほぼ同じ。また、観測霊の目撃情報により彼の犯行だということとが断定されたのだ。

「しかし、21歳の女性か」

「年齢は関係ない。問題は動機だ」

動機、と聞いて契約者に動機なんてあるのかと指摘しそうになった。モラトリアムという存在があるのを忘れていたのだ。

容疑者と断定されている【PM177】は女性で、21歳の無職。名前は稲田聖奈。2年前に星が輝き、その存在を確認されている。しかし正式な契約者としての登録はされておらず、当時もコンクリートの壁が爆発したということが最初の能力の使用方法だった。記憶障害により、自分の行ったことと血縁者の記憶を丸ごと失っている節があり、前回に警察で保護を行ったときは自身の家族を忘れていた。

対価は血を流すこと。彼女はバタフライナイフを携行し、能力使用

後は手首に傷をつけて対価の支払いとしている。現在は身寄りを失くした彼女を風俗店の店長が保護し、匿う代わりに風俗嬢として働くことを義務付けているらしい。

「被害者の教諭は、前々より校内で女子生徒に対するセクハラにより悪評が漂っていました。私生活面でも、近隣住民からは何をしてくるか分からない怖い人だということだ…」

「被害は中学生だぞ？成人の【PM177】が殺害した動機にはならん」

「いや、もしかしたら妹とかが…」

「家族の記憶は失っている」

ホワイトボードには、被害者の男性写真と稲田聖奈の顔写真が貼られていた。そのほか、一応関わりがありそうな人物の写真や情報があったが、以前として男性と稲田の関係が分からないらしい。

会議室で参戦していた【AS093】は、つまらなそうに椅子に座りながら稲田聖奈のことについて考えていた。

今、説明している河野という警官と霧原は、どうやら風俗嬢として稲田が働いていることを知らないらしい。組織にいる身としては、これ以上はない有利だった。

組織は【PM177】をできれば味方として引き入れたいと企んでいる。もしこの機会に彼女と遭遇できるのならば、可能であれば捕獲して身柄を組織に引き渡したい。例えドールになり下がったとしても、利用価値は十分にあるはずだ。

「それに、彼女は今は行方不明だ。観測霊でも発見できず、我々の警備網にも引つかかかっていない。あの時にしっかりと拘束していれば…」

血を流すことが対価ならば、場合によっては爪先や歯茎から一定量は血を出せばそれで対価となる。また、対価を支払う前に能力は使役できるし、何せ自意識のない契約者となれば、誤作動でも能力を暴発することはあり得る。

「…俺はどうすればいい」

「お前は私と一緒に現場へ向かう」

「…能力は発揮できないぞ」

「そんなことは百も承知だ」

腕を組んだ霧原は、契約者の能力を本当の意味では知らない。ただ研究者を通じて知っているだけで、独学で得たものは戦法程度ではない。

故に契約者を連れていけば、それなりに事件解決への道を開けると読んだのだろう。

パイプ椅子に座り黙っていた【AS093】は、自分なりに合理的な判断を下した。事件現場が見られるのならば、【PM177】の痕跡は残っている可能性がある。組織に加入させるためにも、少しでも情報が必要だろう。ならば、向かうことに無意味だとは感じない。

「…分かった、行く」

「ああ。では河野と斎藤は容疑者家族に、【PM177】がどこへ向かったかを聞いてくれ」

「課長、私も付いていきます！」

不意に斎藤という警官が反論する。霧原個人で契約者と同行するのは危険だと判断したのだろう。

だが、そんな心配をよそに霧原は言いのけた。

「こいつはサングラスさえかけなければ能力は発動できない。体術には自信もある。お前は私ができないことをやっている」

「…そうですか」

少々、不満があるだろうが、斎藤はそれ以降は押し黙っていた。

共同歩調（後書き）

2話完結型（前半と後半）として連載予定。
タイトルも2話で1つ。

掲載予定は2か月に1話程度。早くて1ヶ月半で1話。

戸惑い【前編】

稲田聖奈。通称【PM177】が、物質の膨張　その能力を初めて使ったのは、2年前のことだった。

当時、大学生になったばかりの彼女は、家族の元を離れて1人暮らしを始めていた。生まれも育ちも山梨県の山村だったためか、人一倍都会への魅力を感じていた稲田は、進路を決める時には迷わず東京の大学を第一志望にしていた。

親は最初は反対をしていた。大事な1人娘を東京で1人暮らしさせるということに、大きな抵抗感があったからだろう。しかし、長年の努力による稲田の学力は県内トップクラスであり、また高校の推薦もあってか、親は渋々ながらにそれを承諾した。

稲田自身、東京へ行ったことが無いわけではなかった。小学校の修学旅行では東京観光で、家族で東京へ行ったこともある。中学、高校時代でも友達同士で東京へ遊びに行った経験もある。彼女は東京をそれなりに知っている、自信を持っていた。

夢の東京生活。最先端の流行ファッションを知りつくし、大学でもキャンパスライフを満喫するつもりでいた。夢と希望に満ちた東京、その陰に潜むものなど一切知らずに。

そんな彼女がコンクリートの壁を爆破したのは、当時付き合っていた彼氏との別れ話で纏れたのがキツカケだった。

東京へ上京して数カ月、同じサークル内で気が合い付き合っていた彼氏だったが、その彼氏はどうやら最初から遊び目的だったらしい。大学時代を満喫したいという願望ばかりが先走り、とりあえずという形でも彼女を作りたい。そんな軽率な考えを持った彼氏は、複数の同年代の女性と関係を持ち、稲田もその1人として加えていたのだ。

ある日の大学の講義終了後、大学の人通りの少ない廊下へ彼氏を呼

び出した稲田は、とっかけひっかえに彼女を作る男なんて信じられない！そう言い放った稲田に、彼氏は謝りもせず傲慢にも使い捨てる女と罵った。

ファッションセンスもよく、性格も優しく、成績はそこそこ。それでいて外見も悪くないということと付き合っていた稲田は、ここでようやく後悔した。こんな最悪な展開を迎えるくらいなら、最初から付き合うなんてことしなければよかった。もっと相手のことをよく知るべきだった、と。

しかし後悔は役立たず、目の前にいる男は自分を1つの使い捨ての道具同然に見ている。対して稲田は、その視線をまともに見ることができず、歯を食いしばっていた。

そのうち、男は見切りを早くつけたくなってきたのだろう。稲田に「じゃあ、そういうことだから、明日からは関わんなよ」と言っただけ見えた男の背後には、別の彼女と思われる女がこっそりとこちらの様子をうかがっていた。

また別の女……！

嫉妬、というより怒りが湧きあがっていた稲田は、どうしようもなく「ふざけんな！」と言って、真横のコンクリートの壁を握り拳で叩いた。全く意識せず、ただ悔しい感情を殴りつけることで発散しようとしていただけのその思いは、あらぬ結果で返ってきた。

ブワツと泡のように膨らむ壁。固く、人の筋力では到底砕けることのないその頑丈な壁が、まるで洗剤を含んだスポンジのように泡を大量に作り、膨張していた。それも10秒という時間ではなく、1秒足りずに、だ。

男はその光景は見えていなかった。すでに稲田より背を向けていた男は、目の前で自分を待ち、愛おしそうな目をしている他の彼女の顔を見て、ニコリと笑っている。当の彼女はまだ、彼氏の後ろで起きている異変には気付いていない。

ポコポコツと膨張し、その膨張は壁を伝って彼氏のすぐ横にまで迫る。泡は両手で抱えるのが精いっぱいなほど大きな泡もいくつも見

られる。

瞬間、彼女の短い悲鳴が口から漏れる。彼氏はすぐ横で起きた異変に、遅れて気付いたようで顔を向けた。しかし、もう既に遅かった。膨張が限界にまで達した泡が弾けた瞬間、どういう原理かは分からないが弾けた周辺が爆音と硝煙で包まれ、高温度の熱が男の皮膚を焼き、爆発の衝撃が体を裂く。

衝撃は窓や地面を裂き、校舎を大きく揺らした。爆音は校舎に残っている他の生徒の耳にも響き渡り、その音がなんなのかは経験せずとも直感で分かった。だが、その理由までは分からず、ただ避難したほうがいいという総意の元、全員が校舎からの避難を、爆発から1分後には開始していた。

鳴り響く警報ベル。訳も分からず叫ぶ女子生徒。偶然にも爆発現場を見ることのできた生徒が写真を撮り、興奮したり青ざめたりしている。教員はマニュアル通りに生徒を避難させ、消防車と救急車の手配を急ぐ。

そして爆発現場には、1つの無残な死体と訳も分からず立ち尽くす女性、今自分が何をしたか、そして何が起きたのかを把握できず震える手を見る稲田の姿があった。

「…これは酷いな」

日も暮れるという時、古びたアパートの一室に入った【AS093】は、感情も無しにそう呟いた。鑑識の立ちいった跡が残る事件現場には、遺体こそは無かったがそこらじゅうに飛び散る血痕が染み付いていた。ただ、被害者の私生活を表す私物の中には、女子高生援交物と思しき成人雑誌が複数散らばっていた。被害者はどうやら、こういう気があつたらしい。

霧原は、そんな私物など視界に入っていないかのように、血痕の様子や背の低いテーブルの上のメモ帳を見ている。【AS093】はそんな霧原とは対照に、別段興味のわくような私物が無いことを確認すると、壁に背持たれて気を楽しんでいた。

「…お前は何か感じ取らないのか？」

「契約者はエスパーじゃない」

「…そうか」

「しかし、まあ良いこともあるわな」

「え？」

鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔をした霧原に、【AS093】は平然と言う。

「どうやら稲田聖奈は、出張ヘルスをやってるらしい」

「出張…ヘルス？」

「…ソープ店とを考えてくれれば幸いだ」

その瞬間、意味を理解したのだから霧原は、顔を真っ赤にして背けた。

事前調査では風俗店で働いているということは承知済みだったが、出張ヘルスだとは知らなかったらしい。見たところ初心というわけでもない顔なのだが、経験や知識がないのだろうか。

「そ、それでどうして、被害者を殺害する経緯になるんだ」

「…プレイの強要、とかだろうか」

よくある話だった。風俗店とは違い、自分の家で性的行為を行うこの仕事では、客は店員の視線を気にすることなくプレイに集中できるわけだ。そうなると自分の好き勝手できると勘ぐる輩も多いわけで、風俗嬢に対してプレイを強要する客も少なくはない。

店とは違い、店員がすぐさま飛んでくるわけでもない状況下では、悲しいことに風俗嬢が少なからず不利なわけで、後々に心身に傷跡を残す女性もいる。小さな規模ながらに、社会問題として数えるべき事柄だった。

「モラトリアムという種類なら、感情の高ぶり…この場合は怒りか恐怖か。それで能力を暴発するなら、合点がつく」

「……………なるほどな」

あごの下に手をあて、ふかぶかと納得する霧原。そこには私情と思えるような感情は垣間見えず、業務の一件について淡々と処理する

ような感覚が、【AS093】には見えた。

「風俗店への聞き込みは？」

「もうしたが、事件発生時から帰ってきてはいないらしい。今も行方は分らん」

「…周辺捜査は？」

「ここから半径10kmの範囲だ。さらに観測霊も使って都内に張り巡らせている」

「んで、見つかってないわけね…」

あきれ顔のような表情を浮かべた【AS093】は、窓の外の眼下に見える道を見た。

その道の、電柱の陰にあからさま存在をアピールしている物体があった。透明といえばそうなのだが、明らかに他の景色と違って歪んでいる。

「……………」

「私たちも捜査網を広げてはいるが……………どうした？」

窓の外をジッと見ていた【AS093】の様子を怪しく思ったのか、霧原が問いただしてくる。

それに答えようとしたのだが、言うよりも早く霧原が窓の外の様子を見に来る。その挙動にはあからさまな敵意がこもっていて、明確な反抗意識が【AS093】にあったならばすぐにでも処置を取る、といった様子だった。

だが、霧原が外の景色を凝視した時には、景色の歪みは無くなっていた。歪みがあったところは、周囲の風景と至って変わらぬ、ただの電柱の姿だ。

「……………」

「…なんだ？」

「…いや、なんでもない」

どこか悔しそうな声を出した霧原は、そくさくと玄関へ向かっていく。それが退却することだということは素人目で見ても分かることだったが、【AS093】はもう一度、現場から出る前に外の景色

を見た。

だがそこには歪みはなく、やはり至って変わらぬ風景が広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357w/>

DarkerThanBlack-暁の鼓動-

2011年11月26日01時46分発行